

〈翻 訳〉

## アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈スタークウェザー書簡一訳および註〉(9)

阪 上 敦 子 監訳  
松 波 満 江  
小 島 紀 子  
矢 吹 世 紀 代  
檜 本 尚 美

書簡翻訳続き

《167》【松波満江 訳】

マサチューセッツ州ボストンにて、1882年5月1日、アリス・J・スタークウェザー宛

拝復

4月3日付のはがき<sup>1</sup>を無事受け取りました。仰っておられる他のものも届いています。そのことについてはお礼を申し上げます。以前のように、身体に負担がかかるほど長い手紙を書いていただくよりも、はがきにしてくださいってかえって喜んでいきます。

女性宣教師の方々からの手紙をいつも心待ちにしていますが、8～10枚もの手紙を読んでいますと、このために眠れない時間や神経が疲れるのではないかと心配になります。むしろ短い手紙にさせていただいて、もし我々に出来るなら、あなたの健康や体力を守りたいと思っております。

敬具

N. G. クラーク

- 1 この「4月3日付のはがき」は現在見つかっていない。

〈240 (p)〉【小島紀子 訳】

京都にて、1882年9月7日、クラーク博士宛  
拝啓

新学期に期待しながら、比叡山<sup>1</sup>から戻って来て2日になります。私自身の健康状態は良好ですし、[A. Y.] デイヴィス<sup>2</sup>さんは有馬<sup>3</sup>にいますが、京都に13日か14日には戻って来たいとのことです。サン・フランシスコにいるパーミリーさんからはよい知らせがありました。パーミリーさんがその恩恵を受けるには間に合わなかったのですが、北のエゾ島 [北海道] に宿泊施設を作るという計画はすばらしいと思います。

比叡山から戻ると、ご親切にもプレゼントして下さった『シャフ博士の聖書辞典<sup>4</sup>』が届いており、とても嬉しかったです。この辞典は大変重宝するでしょうし、使ってみていかに役立ったかをお伝えできると思います。神戸女学校の見通し<sup>5</sup>がうまくつきそうで喜んでいきます。

敬具

A. J. スタークウェザー

- 1 比叡山のキャンプ地。関西の宣教師達は、避暑のため比叡山で夏を過ごすことが多かった。
- 2 Anna Y. Davis (1851-1944) アメリカン・ボードの独身女性宣教師として1879年10月3日來日。兄は神戸にいた Robert Davis. H. F. Parmelee が病氣になり、人手不足の同志社女学校を1882年2月から手助けする。スタークウェザーの突然の帰国のあと、着任したばかりの Frances Hooper と同志社女学校の運営に奮闘する。フーパーについては本稿最後の〈236〉註5参照。
- 3 有馬の山中にもキャンプ地があった。
- 4 Philip Schaff (1819-1893) スイス生まれ。ドイツで教育を受けてアメリカで活躍した教会史家。辞典も数多く出版している。この辞典はSchaffが編集した *Dictionary of the Bible* で Philadelphia の American Sunday School Union より1880年に出版された。

- 5 1879年、V. A. Clarkson が神戸の女学校の第2代校長に就任し、「英和女学校」と校名を変更して教育課程の改善に取り組んでいたが、体調を崩してこの年1月に帰米。その後、E. Talcott が校長代行となって学校の運営にあっていたが、E. M. Brown (カールトン・カレッジ卒) の来日予定の見通し (第3代校長となる) が立っていたことを指すと考えられる (着任は1882年11月)。

### 〈88〉【矢吹世紀代 訳】

日本の京都にて、1883年1月21日、ジュエット夫人<sup>1</sup>宛  
拝啓

【いずれ天国に行くときには】神の書物が開かれ、頑張った仕事のことや心を痛めたこと、そして成し遂げたことが数々明らかになるでしょうが、それに対して私の日記では、ひとつかふたつの事柄しか書き留める時間がなかったことがわかります。学校の教師をしているものには、誰も「日誌のような手紙」は書けたためしがないはずで、女学校の雑多な仕事をしながらではとても無理です。

### 〈ある生徒の入学許可をめぐるいきさつ〉

9月に新学期は思ったよりはるかに順調に開校したのですが、それでもやはり人生は思う通りにはいかないもので、難しい問題に私たちは直面することになりました。今回は、規則では入学許可にならない、問題のある生徒<sup>2</sup>の入学についてでしたが、縁故でしたので入学させるつもりでした。ですが、日本人側の意見では、この生徒はまわりにはっきりと悪い影響を与え、入学することで本人がよくなるよりも、どう考えてみても害になる方が多いだろうとのことでした。一見取るに足らない事柄にどれだけの時間を費やしているか、あなた様にはご想像になれないでしょう。でも、何度も話し合い、つまり「相談」<sup>3</sup>をしなければならなかったのです。それもいつ爆発するか分からない、どこの休火山の上を歩いているのかも知らず、また誰が自分の主張をまげずに約束を守り、まったくの裏切者でないかをずっと知らずにです。

幸運にも事態は収束し、入学は許可されました。立派なクリスチャンである兄から特別な指導を受けたこともあって、彼女は非の打ちどころなく振る舞っています。

#### 〈昨年の激務と自身の体調について〉

パーミリーさんと宮川さんの両方<sup>4</sup>が教員名簿から消えた前の学期をなんとか切り抜けたあと、去年の夏は思っていたよりはるかに疲れていました。そして、この秋の間、ずっとつらい咳でほとんど眠れぬ夜が数週間続きましたが、寛大な神のお助けと「あなたの日々は」<sup>5</sup>という神の約束のおかげで、なんとか「踏みとどまり」、日々の職務をやり遂げることができました。その当時は辛くて書けなかったし、いちいち書いては仕事が務まらなかったでしょうが、今ではすべてが収まっているので短く述べるだけで済むようになり嬉しいです。体調が悪く、自室で食事を摂ったのは幸いにも一回だけで、こんなことは7年ほどの間で最初で最後でしょう。

#### 〈盗みを働く生徒の退学〉

1882年の秋はずっと記憶に残ることでしょう。と言いますのは、大変厳しい校規にまつわる問題が初めて起こったあと、また似たような問題が出てしまったのです。2週間もの間、皆心配しましたが、必要な捜査や話し合いを繰り返した結果、そのときまではまったく疑われていなかった少女が、クリスチャンではなかったのですが、盗みの現場で捕まりました。それまで何ヶ月も盗みを働いていて、とうとう「罪」がばれてしまいました。もっと頻繁に盗難が発生していた男子校 [同志社英学校] では、退学を賢明なことだとしているので、結局彼女は不本意ながら退学することになりました。新島氏は私たちのように寛大な処置を取りたかったのですが、試行錯誤の後、「法に任せよう」ということになりました。

## 〈教師の辞職と婚約をめぐる学内への影響〉

[大阪で] 伝道の仕事につくので女学校を辞任することになったとても有望な教師<sup>6</sup>が、学校を辞職した翌日に生徒の一人<sup>7</sup>と婚約しました。この婚約が公にされたのは少なくともその時でした。その生徒は女学校に長くは在籍していませんでしたが、先生方には「キリスト教を求道している」と公言していました。でも内々ではちがうことを話し、東京で「学識ある人々」といたこともあって、他の生徒の心を乱すような都会の魅力ある話をしていました。この教師はクリスチャンとしては第一人者で、人を引きつける魅力も多く持ち合わせていましたので、彼の婚約は大騒動になったのです。

その後数ヶ月の間に、前はクリスチャンになりそうに思われていたかなりの数の生徒が、「信仰を失った」と自慢げに言うようになり、あらゆる面で前より扱いにくくなりました。去年までは、日本人の生徒を教える場合には「しつけ」は必要ないと思っていました。最悪の事態は、年少の頃から女学校に三年間いて、小さい時から特に彼の下で教育を受けてきた生徒の中で起こってしまったのです。彼は生徒には「頼りがいのある兄」とか「齒に衣着せぬ人」といった存在でした。そしてこのたびの婚約が、生徒の心に無意識の中で動揺を与えたのではないかと思います。この試練を乗り越えて、最後にはより強いクリスチャンになってくれるといいのですが、盗みで退学になった少女には残念ながらその望みはないでしょう。そして以前受洗を希望して、ここで6年過ごして少しはクリスチャンになりかけていると思われたもうひとりの少女が、夏に私たちがいない間に、お祈りのときに笑ったり、クリスチャンの悪口を言うようになったりして、わがままになっていました。

## 〈婚約後のふたりと女学校の英語教育について〉

その若者〔宮川経輝〕自身は同情に値しました。というのも、妻を同伴せず、婚約もせずに伝道の分野に身を投じるのはよくないと、日本人の友人がみな諭したのです。この婚約した生徒はすぐにでもクリスチャンになるだろ

うと、とても有望に思えたのですが、「人の心の中なんて誰に分かるでしょうか」<sup>8</sup>ということ、この地にいるとよく思い出します。

でも今年のうちには出来るだけ早くクリスチャンになろうとしているようにはみえました。彼はもどかしくなって、「キリスト教文化」を体験してもらいたいと、彼女をクリスチャンの日本人の家庭<sup>9</sup>に預けたのでした。神戸ホームの出身で、真の「キリスト教文化」をしっかりと身につけた人を（私たちの学校内で騒動が起きないように）、彼の伴侶として選んであげることができたのです（実際は誰も選ばなかったし、こんなおせっかいを焼くことも全くしていませんが）。彼女なら英語のよくできる生徒になっていたことでしょう。でも宮川は婚約と同時に、「やる意味があるほど」英語の勉強は長く続けられないと判断して、彼女の勉強を他のことに向けました。というのも、一番下のクラスに労力を注いでそこに影響を与えるだけにしたくないと、私たちが言うようになってから、宮川は[生徒に]英語の勉強をさせるのに消極的になっていました。

少なくともさまざまな科目を私たちは教えたかったのですが、彼は私たちが日本語を勉強することはあまり奨励しないのに、より高度な英語科目はすべて自分が担当すると主張するようになりました。

現在、私は生徒が熱心に参加してくれる神学、歴史、英文法、英作文のクラスを担当していて、他に日本語で「コリント人への手紙」を読むクラスも受け持っていますが、すべて毎日教えています。もちろん英語教科書の訳が分からないといけません。こうしたことを述べるのは、昨年の[反英語教育の]風潮が確固として強いものだったということのを思い起こしていたからです。でも不思議にも、英語はこれ以上ないくらい人気が出ましたし、その学年で英語を始めたい生徒や下のクラスの生徒も増えて、今までにないくらい大きなクラスになってきています。つらいのは、そんな[英語への]反対意見には正面から向き合えないことです。「それは敵ではなかったのです。敵だったら、耐える事ができたでしょうに。」<sup>10</sup>

日本人が移り気かどうかというご質問に、十分答えられるかどうか分かりませんが、こんなこともありました。それは、この同じ若者 [宮川] が履修科目のコースを立案して、「英語のみ」での授業にしようとしていました。でも生徒はみな時間的に余裕がないかもしれないし、完全な英語課程にはついていけないかもしれないという意見が出た時、語気を強めて、「それでは我々にとってふさわしい伴侶になるわけがない！」と言いました。それから間もなく私がない時に、ステーションの何人かに、「普通の人と英語を話してもつまらない。楽しいのはジョゼフ・クック<sup>11</sup>のような人だけだ」と言いました。新聞でもよく目にするような人が彼の「あこがれの的」なのです。

日本の習慣に反して、彼は大阪まで電車で婚約者に付き添って行きました。そして目的地の岡山へ行く前に、自らの手で「キリスト教文化」を体験させておこうとして、しばらくの間、自分の「独身寮」で3食を摂らせて日中はそこで過ごさせました。将来の妻の勉学をやめさせてしまったので、6月までは学校に残り勉学に励み、教鞭を取りたがっていた卒業生<sup>12</sup>を、最善を尽くした結果、[家庭教師に] 引き抜きました。この女性の将来計画をあきらめさせる「相談」に1週間近くかかりました。日本人の昔からの氏族の精神では、力を持つ者が同時に良くも悪くも他者に影響を特に与えやすいものなのです。

#### 〈自身に与えられた課題〉

私たちのミッションの歴史は10年以上前にさかのぼります。今まで最も恐れられていた妨害は、キリストの敵だと公言する人たちからのものでした。思い違いでなければ、これからの10年の間に（御霊の剣で）戦わなければならない最大の戦いは、キリスト教の仲間同士で起こるでしょう。本国の皆様方の祈りをとても必要としていますので「皆さんを忘れる」なんてありえません。祈祷週間はよく守られていました。そのお蔭で、私たちの屋根の下で永遠に続く善行もあったと思います。でも人の心はとても奥が深いのに、よ

き種は地表近くにとどまるものなのです。

最近、人生の再出発を掴んだように感じるがあります。なぜなら、以前よりあまり疲れないでたくさんの仕事を容易にこなせるように、神のみがしてくださっていると信じているからです。そして、私たちが教える宗教のよい実例になるように、キリストの御霊で満たされたいと思いますし、神のみが与えられる力強い刃で「肉体の武器」<sup>13</sup>に絶えず立ち向かいたいのです。

### 〈火事の話〉

最近、神の慈しみと恵みを深く感じる出来事がありました。火災から私たちをお守りくださったのです。朝6時から7時の間のことでしたが、料理人兼男衆の声が屋根裏部屋や屋根の上から聞こえ、まず恐れたのはいつものように「火事」のことでした。

案の定、その男が入ってきて幸いにも見つけたのは煙突のそばから発する「怪しい」煙でしたが、すぐさま調べに行ってくれました。男たちはうまく消火して、焼けた部分を砕き割りました。そしてその後の調べでは、この火元となった煙突には、してはいけないと指示されていたことを大工はやっていたことが明らかになりました。他の2本の煙突は、宣教師が監督していたので指示通りにやっていました。その大工は煙突の役割を果たしている2本の土のパイプの間に、指示されていた石やモルタルでなく、軽い材木の木片を置いていたのです。これが数日かけてゆっくりと燃えていました。不思議なのは夜間に燃え広がらなかったことです。

先週の土曜日に自分の部屋を掃除しましたが、幸いにも「修理」は少しですみました。料理人の妻はこの火事にはたいそう関心を持ったようで、たまたまこんな話をしてくれました。火事の数日前の夜、ある少女が病気の生徒のために水を汲みに降りて来て、就寝前か、または7時か8時には消されているはずの「火鉢」の中から火が燃えているのを見つけたのです。神の御心で、夜中にたまたま階下に降りてくることがなかったら、1階から火は燃え



広がっていたことでしょう。

〈京都ホームの新年の様子〉

この冬は平年より雨が少なく、井戸という井戸もほとんど枯れてしまっています。神は私たちのことを御心にかけてくださっていますし、私たちも自分たちや他の人のことをますます気かけながら、努めて神を信頼してまいります。

新年を迎えてからはずっと通りに人があふれ、大勢の子供たちはいたるところで風揚げに興じています。宣教師の子供たちは、学校<sup>14</sup>が今年新たに開校して大喜びしています。9名が毎日出席しており、今日、子供たちが新しい小さな教室にいるのを目にしてうれしかったです。教室は父親が資金を出し合って作り、母親が全員で教師役を分担しています。まさに京都ステーションが教えることに時間をあてていて皆とても忙しいです。

月曜日の夜、この手紙を書こうと今夜の「語学クラブ」を休んで家にいます。必死で書いているのがおわかりいただけるでしょう。私たちの仲間は人数が少ないので、数少ない集まりでは欠席すると寂しく思われます。先週、通常の祈禱会の前に「ステーションの夕食会」を開きました。新年から“Spiritual Songs for Social Worship”<sup>15</sup>の歌を歌って心から楽しんでいます。この中には私が小さかった頃に感銘を受けた讚美歌がたくさん含まれていて、自分が恵まれた時代に生まれたのをさらに感謝しています。デイヴィス先生と新島氏のおふたりが、ここ女学校で8時から9時まで聖書のクラスを受け持ってください、こんなにぜいたくなことはありません。学校中がその時間には、それぞれの聖書のクラスに分かれて勉強していることをご想像ください。そしてそこにいる私たちにお恵みがありますように特にお祈りください。

敬具

アリス J. スタークウェザー

- 1 太平洋ウーマンズ・ボード (Woman's Board of Missions of the Pacific) の外国課秘書 Mrs. H. E. Jewett のこと。
- 2 氏名不詳
- 3 *Life and Light for Woman* (『女性のための生命と光』) (1882年10月号) に掲載された“Letter from Miss Starkweather” の中でもこの「相談」の習慣について述べている。「日本人は細部にわたってこまごまと、しかも、互いの感情を害さないように敬語を使って話し合うので、大変時間がかかり、疲れる」と説明している。
- 4 宮川経輝は1882年3月に大阪教会牧師就任のため同志社女学校を辞任。H. F. Parmelee は自身の健康上の理由と父の看病のため1882年7月に離日。
- 5 “as thy day” 旧訳聖書「申命記」第33章25節参照。「あなたのかんぬきは鉄と青銅。あなたの力はとこしえに続く。」
- 6 宮川経輝のこと
- 7 朽木次子のこと。福知山出身。地元の小学校を終えた後、父、綱徳の準養子となった叔父の綱一と共に東京へ出る。芝佐久間町の小学校高等科を終え、お茶の水女子師範の予科にも一時通っていたが、綱一の京都転勤とともに同志社女学校に入学。
- 8 旧約聖書「エレミヤ書」第17章9節参照。「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。」
- 9 岡山の木全正修宅で家庭見習いをさせた。
- 10 旧約聖書「詩編」第55章13節参照。「わたしを嘲る者が敵であればそれに耐えましょう。」スタークウェザーは女学校内で意見の相違をはっきり指摘して教師間で亀裂を生むとむしろ対応が難しいと感じていた。
- 11 Joseph Cook (1838～1901) アメリカ会衆派教会のキリスト教思想家。1882年来日。横浜海岸教会での演説を皮切りに、関東や関西各地で講演を行う。来阪の際には宮川が通訳を行った。
- 12 神戸女学校から転校してきて同志社女学校の邦語科、英語科を卒業し、助教として学校に残っていた高松仙子のことか。
- 13 新約聖書「コリントの信徒への手紙2」第10章4節参照。「わたしたちの戦いの武器は肉のものではなく、神に由来する力であって要塞も破壊するに足りません。」
- 14 1883年1月に開校した宣教師小児学校のこと。
- 15 1831年出版の讃美歌集。Thomas Hastings と Lowell Mason 編集。Gardiner Tracy 社 (Utica, N. Y.) より出版。

## 《221》【榎本尚美 訳】

マサチューセッツ州ボストンにて、1883年3月14日、アリス・J・スタークウェザー宛

スタークウェザー様

ここ何か月もお便りが一通もないので、京都の仕事について、もしあるとすればですが、苦勞されたり、あるいはうまくいっていることがあるのかどうか、私にはほとんど分かりません。何も聞いていませんので、便りがないのはその状況でご苦勞も最低限でありお元気だと思っております。

御自分の身に与えられたとげからあなたが逃れられるとは思いませんが<sup>1</sup>、至福千年<sup>2</sup>はまだ来ていませんし、あなたが日本にいるのはさまざまな困難があるためであり、もっと改めた態度を示すべき人たちのふさわしくない精神や卑しい品性のせいであるということ、そのとげがきつと教えてくれることでしょう。あなたや他の宣教師は、非常に多くの色々な関係の中で必要とされていますし、キリストの聖霊が人の心を支配するようになるには時間がかかるのです。「勇気も、希望も、いささかも減退せずに、絶えず、まっすぐに、進路をとってすすむのだ。」<sup>3</sup>とあるように、決して失望することなく、希望を持って上を向いて前に進んでくださると信じています。

[A. Y.] デイヴィスさんにも心からよろしくお伝えください

敬具

N. G. クラーク

- 1 新約聖書「コリントの信徒への手紙2」第12章7節参照。「それで、そのために思い上ることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。」
- 2 the millennium 語源はラテン語の mille (千) と annum (年)。これまでの世界が終わりを遂げて、キリストが再臨してこの世を統治するという千年間のこと。いつの時代のクリスチャンもこの「至福千年期」が到来することを信じて待っている。

- 3 “late not a jot of heart or hope but still bear up and steer right onward” late は bate の誤りで Clark の記憶ちがいか。イギリスの詩人 John Milton (1608-1672) の Sonnet XXII To Cyriack Skinner 「失明についてシリアック・スキナーにおくる」からの一節。本稿中の訳は、宮西光雄『ミルトン英詩全訳集』上巻 東京：金星堂、1983年、p. 243 による。

〈236〉 【阪上敦子 訳】

大阪にて、1883年4月18日、クラーク博士宛  
拝啓

16日からここで開催されている宣教師会議<sup>1</sup>に私たちは参加していますが、「盛大ですばらしい会議」です。これまで一度も日本では目にしたことがないほど、聖霊が近くにおられるように感じます。皆がいと高きところからのこの力に依存していることを、これまでにないほど感じています。この大会についてはきっと詳しく報告があることでしょう。忙しかったとはいえ、これまでの何か月かの間に、もっとたびたび、そして簡潔に手紙が書けなかったことを心から申し訳なく思っています。今はようやく必要な休みを目前に控えています。

ミッションやステーションの希望に沿うようにできるだけ誠実に努めながら、毎日4時間教室で授業をして、その上、新しい部門などを始めるのに必要な準備に、多くのきれぎれの時間を取られておりました。全員が実感しているのは、学校にはかなりの再編成が必要だということです。最高の日本人や外国人の仲間と慎重に検討してやり始めた、その時点では最高の運営計画でしたが、数年間やってみて未熟な計画だったと気が付きました。どうしようもない状況のため、敬愛され、とても尊敬されていた先生方<sup>2</sup>がやめてしまいました。ただ不思議としか言わざるをえないのは、未完成の仕事をもとめるために残された私たちが、現在も繁栄を続けていることです。

大きな負担を感じながらも神戸に二度、そして [A. Y.] デイヴィスさん<sup>3</sup>も一度出かけました。出来ればゲールディーさん<sup>4</sup>と一緒に来る新しい女性

宣教師のひとりを確認したかったのです。首尾よくフーパーさん<sup>5</sup>、このひとが京都にいてくれたらいいのですが、と一緒に京都に帰ったところ、ステーションではラーネッド夫人<sup>6</sup>のことを皆がとても心配していました。本部からは、必要なら帰国の許可をご親切にも夫人に与えておられたようですが、ご存じのように、これまでにないほど用心してラーネッド夫人は肺の病を克服されましたが、今回の精神的なトラブルは日本ではまったく治療できず、健康を回復して人の役に立てるようになるための唯一の頼みの綱は、暑くなる前に出来れば早急に帰国して治療を受けることなのです。

ラーネッド夫人はご主人との別れを覚悟したあと、帰国に付き添ってくれるように私に頼んでいます。今の夫人の状況では、だれか女性が同行しなければならぬでしょうし、その役は、「宣教の分野で〔独身女性宣教師の中で〕二番目に日本に長くいて<sup>7</sup>休養を取るのに十分に値する」私にめぐってきました。彼女の健康を考えるとぐずぐずしておれませんので、5月8日頃に神戸を出港予定の汽船に間に合わせるためには、準備を急ぐことと身軽であることがもちろん必要です。

私たちの動きについては逐一お伝えするつもりです。申すまでもありませんが、帰国を予測して女学校の状況を調整するには、少なくとも1年は必要でした。でも神の御手ははっきりとその方向を示されているのなら、すべてを神の御手に委ねることができますよね。

心配するのをやめて、帰国に向けてほんの少しでも準備を始めてからは、これまで休むことなく続けてきた仕事から離れて、完全に休みをとるのがどれほど必要だったかに気が付きました。もしこのまま綱を強く緊張状態にさせていて、これ以上長く引つ張っていたら、きっとぷつんと切れてしまったことでしょう。この宣教師大会にできる限り長く参加すれば喜ばれるでしょう。会が終わる前に戻ります。

敬具

アリス・J・スタークウエザー

- 1 第二回プロテスタント宣教師会議のこと。英語名は General Convention of the Protestant Missionaries in Japan。1883年4月16日から21日までの5日間、大阪市の川口で開催された。日本在住の外国人宣教師らによる会議で、第一回に続いて J. C. ヘボンが議長を務め、各派から106名の宣教師が参加して親睦をはかった。今回のメインテーマは「現地教会の自給」で、4月19日には「教会の自給」についても議論された。
- 2 宮川経輝と H. F. Parmelee のこと。
- 3 Anna Y. Davis (1851-1944) 前出。本稿〈240〉註2
- 4 Mary Elizabeth Gouldy (1843-1925) 1873年10月に日本へのアメリカン・ボード独身女性宣教師3人目として来日。大阪ステーションで1880年まで働いた後、1881年から82年には一時帰国するが、本稿にあるように1883年に再来日。
- 5 A. Frances Hooper (1854-1922) 本稿にあるように1883年3月来日。スタークウェザー帰国後、[A. Y.] Davis と女学校で教える独身女性宣教師。「明治18年事件」後も同志社女学校に戻り1888年6月まで教える。後の J. D. Davis 夫人。
- 6 Florence H. Learned (1857-1940) 夫と共に1875年11月に来日。宣教師夫人として女学校を手伝うが、体調不良で度々が帰国していた。今回は精神的な病のため、帰国して療養することになった。
- 7 スタークウェザーは1876年4月に来日。1883年4月にこの手紙を書いた時点で、スタークウェザーより長く関西にいてまだ休暇で帰国していないのは、J. A. E. Gulick (1874年6月来日、神戸に着任)【*Asphodel* 46, p. 171 参照】のみであった。

## 〈後記〉

2010年発行の『アスフォデル』第45号から5年にわたって掲載の「アメリカン・ボード宣教師文書——同志社女学校女性宣教師を中心として——〈スタークウェザー書簡—訳および註—〉(1)～(9)」を今回で終えるに当たって、A. J. スタークウェザーについてのまとめをして置きたい。

今回の最後の手紙にある通り、スタークウェザーは滞日7年(1876-83)の後、病気で帰国することになったラーネッド夫人に付き添って1883年5月5日に帰国する。

彼女の在日期間（1876.4.7～1883.5.5）を概観してみると、

- 第1期（1876-79年） スタッフ不足で孤軍奮闘<sup>1</sup>、大きな責任と、莫大な量の重労働を余儀なくされながらも、一生懸命日本人の中に溶け込もうとし、日本古来のものを極端に賛美した最初の2年半、
- 第2期（1879-81年） その労苦が報われて、日本人教師<sup>2</sup>と心を合わせて同志社女学校の基礎固めと発展に尽力し、初めてキャンパスの外に出て伝道に従事することも出来るようになり、最高に充実しているように見えた2年間、
- 第3期（1881-83年） しかし実際には、1880年末頃から表面化しつつあった日本人共働者<sup>3</sup>との軋轢のために体調を崩してしまい、自らの不遇を激しく訴えた（〈234〉〈235〉の書簡参照）2年半であったと纏めることが出来よう。

スタークウェザーの体験は、明治の始めにはるばる日本にやって来て、封建色濃い古都京都で約7年間、日本人と共に過ごした外国人女性の異文化体験の一つのモデルとしてみても、大変興味深いものがある。

さて、帰国後のスタークウェザーについて、分かっていることを記述して置く。〈236〉にもある通り、ラーネッド夫人に付き添って帰国というのは、スタークウェザーにとって全く予期していない出来事だった。しかし、帰国準備を始めて見ると、どれほど休暇が必要であったかが実感された。実際にサン・フランシスコで出迎えた太平洋ウーマンズ・ボードの役員たちは、別人のようなスタークウェザーの憔悴ぶりに驚いたという。

帰国後の消息に関しては、ABC FMのマイクロフィルムに収められている計12通（1883.6.6～1884.10.28）の書簡から類推する限り、1883年5月31日サン・フランシスコ到着後は、身体の不調を訴えつつ、郷里のイリノイ州エルジンからミネソタ州ミネアポリス、コロラド州デンバーへと転地療養を

していることが分かる。

さらに Mission Register<sup>4</sup> によると、1885年3月31日付アメリカン・ボード解任、1888年イリノイ州エルジン居住という事実が記されている。死亡の日時・場所の記載はない。

ただ個人的に調査した Denver, Colorado (彼女の手紙の最終地) の人名録によると、1887年に出版代理店勤務、その時の住所は 19 and 20 Bankroft blk. とあり、その後職業を電気修理店秘書兼会計係 (1890年以後)、キリスト教活動 (1893年以後) と変え、住所もデンバー市内で計7回変えながら、1897年 (48歳) までは、デンバーの人名録に氏名住所は記載されている。

なお、1898年以後は、同じコロラド州のボルダー (1119 Pearl, Boulder, Col.) に居を移し、1905年56歳まで教師をしていたことが、ボルダーの人名録から判明している。最後に、『スタークウェザー家系図』<sup>5</sup>によると、母 Mary Waite Starkweather は1892年12月3日コロラド州デンバーで死亡、とあるので、母は晩年をただ一人未婚であった娘アリスと共にこの地に住み、最期を迎えたことは十分に考えられる。

残念ながら、それ以後のことは分かっていない。いつの日かきっと彼女の全生涯が辿れることを祈っている。

なお、ここに訳出した A. J. スタークウェザー書簡の原文 (マイクロフィルムより活字化したもの) は、坂本清音編著『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校 (1876-1893) —アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして—』上巻 (同志社女子大史料室叢書II 2010年) C-1~C-87に収録してある。

- 1 スタークウェザー来日の翌1877年に、H. F. Parmelee と J. Wilson が京都ホームで働くべくアメリカン・ボードから派遣されたのであるが、京都府知事榎村正直は2人の京都在住許可を出さなかったため、スタークウェザーは孤軍奮闘を強いられた。さらに、翌1878年7月には、ウーマンズ・ボードのアメリカ独立百周年募金の6000ドルによる同志社女学校の新校舎 (寮生45人収容可) が二



条邸跡に建ったので、ますます人手不足であった。

- 2 宮川経輝と加藤勇次郎のこと。2人共熊本バンド出身の、英学校余科の第1期生であった(宮川経輝の卒業演説は「女子教育論」)。1879年6月卒業後、宮川は女学校の教頭として就任し、女学校のカリキュラムの充実に力を注いだので、スタークウェザーにとって大変頼りになる日本人教師であった。
- 3 山本佐久と、佐久の娘であり、校長夫人でもあった新島八重を指す。佐久は、パーミリーとウィルソンが女学校で働けないので、代わりに舎監として寮に住み込んでいたが、女性宣教師が最重要と考えていた、生活を通して女生徒たちに与えたいキリスト教感化力が、佐久と八重が良しとする士族の女子教育観と異なり、しばしば衝突した。
- 4 Mission Register: The Doomsday Book of the Japan Mission of the American Board, pp. 35-6.
- 5 Carlton Lee Starkweather; *A Brief Genealogical History of Robert Starkweather of Roxbury and Ipswich, Massachusetts who was the Original American Ancestor of all those bearing the Name of Starkweather and of his Son John Starkweather of Ipswich, Mass. and Preston, Conn. and of his Descendants in Various Lines 1640-1898* (Virginia, 1904), p. 195. (KS)